

甲塚古墳発掘調査報告書Ⅲ

2021年3月

奈良大学文学部文化財学科

例 言

1. 本書は奈良県生駒郡斑鳩町龍田北1丁目に所在する甲塚古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は斑鳩町教育委員会と奈良大学文学部文化財学科が共同で2020年2月17日～3月13日に実施した。調査は斑鳩町教育委員会生涯学習課文化財係長荒木浩司、奈良大学文学部教授豊島直博が担当した。出土資料の整理分析および本書の作成は2020年9月～2021年3月にかけて奈良大学文学部文化財学科が行った。
3. 現地調査、整理作業の参加者は第2章に記す。写真撮影は各調査区の担当者が担当した。製図の分担は挿図目次に示した。
4. 本書におけるレベル高はすべて海拔を表し、北方位は座標北を示す。
5. 発掘調査および報告書作成において下記の諸氏、諸機関のご指導とご援助を賜った。
泉 眞奈、柴田拓也、園原悠斗、中久保辰夫、財務省近畿財務局奈良財務事務所、
奈良県地域振興部文化財保存課
6. 本書の執筆は豊島直博、橋本有正、山本美喜、辛川あかり、小林友佳、中川恋歌、上西恭平、金田将徳、北村達郎、谷野誠也、的場紗季が分担して行った。執筆者名は目次および執筆箇所
の末尾に記した。編集は斑鳩町教育委員会生涯学習課参事平田政彦、荒木と協議のうえ、
豊島の指導のもと、松島隆介が担当した。
7. 本書は令和2年度奈良大学特別研究「奈良県斑鳩地域における古墳の調査研究」の成果の一部である。
8. 今回の調査で出土した遺物と作成した記録類は、報告書の刊行後、斑鳩町教育委員会で保管する。

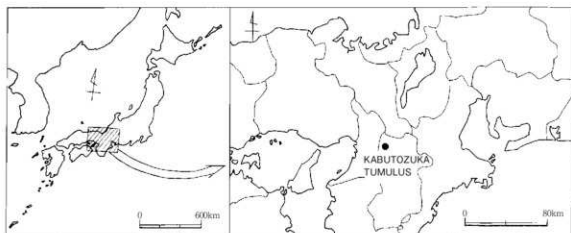
甲塚古墳発掘調査報告書Ⅲ

目 次

例 言

第1章 歴史的環境	的場紗季	1
第2章 調査の経緯と経過	上西恭平・金田将徳	4
1 過去の調査		4
2 発掘調査の経過		4
第3章 発掘調査の成果		7
1 調査区の配置	谷野誠也	7
2 第9調査区	山本美喜	8
3 第10・11調査区	辛川あかり・橋本有正	9
4 第12調査区	小林友佳・中川恋歌	11
5 出土遺物	北村達郎	12
第4章 総 括	豊島直博	14

図 版



甲塚古墳の位置

図 版 目 次

図版 1	1	第 9 調査区完掘状況（北東から）
	2	第 9 調査区墳丘側完掘状況（東から）
図版 2	1	第 10 調査区完掘状況（北西から）
	2	第 11 調査区完掘状況（南東から）
図版 3	1	第 10 調査区東半部検出状況（北から）
	2	第 11 調査区SX01・SX02検出状況（東から）
図版 4	1	第 12 調査区完掘状況（南東から）
	2	第 12 調査区完掘状況（北西から）
図版 5	1	第 12 調査区出土常滑焼片口鉢（外面）
	2	第 12 調査区出土常滑焼片口鉢（内面）
	3	第 12 調査区出土土師器羽釜

挿 図 目 次

甲塚古墳の位置（上西製図）	iv
図 1 斑鳩町内の古墳時代遺跡分布図（松島製図）	3
図 2 調査の様子（松島作成）	5
図 3 調査区の配置（豊島作成）	7
図 4 第 9 調査区平面図・断面図（山本製図）	8
図 5 第 10・11 調査区平面図・断面図（谷野製図）	10
図 6 第 12 調査区平面図・断面図（的場製図）	11
図 7 土器実測図（北村製図）	12
図 8 甲塚古墳遺構全体図（豊島製図）	14

第1章 歴史的環境

斑鳩の位置 奈良県生駒郡斑鳩町は、奈良盆地北西部の矢田丘陵南端に位置する。飛鳥から難波へ至る経路上に当たり、古代には多くの古墳、斑鳩宮や法隆寺といった宮殿・寺院が多く建立された歴史上重要な地域である。本章では、甲塚古墳の発掘調査報告に先立ち、斑鳩町内の主要な古墳と古墳時代の遺跡について述べてい。

前期古墳 前期古墳には、駒塚古墳(16)が挙げられる。築造時期は前期末頃で、斑鳩町内最古の古墳と考えられる。法隆寺の東方に位置し、2000～2002年度に行われた発掘調査では、現存長49m以上、後円部径約34mの葺石をもつ二段築成の前方後円墳であることが判明した(荒木2007, 2011)。

中期古墳 中期古墳には瓦塚古墳群(15)、斑鳩大塚古墳(13)、戸垣山古墳(12)、寺山古墳群(6)などがある。

瓦塚古墳群(15)は、斑鳩町と大和郡山市の境界付近に位置する、2基の前方後円墳と1基の円墳で構成される古墳群である。1号墳は全長約97mの前方後円墳、2号墳は全長約95mの前方後円墳で、3号墳は直径約30mの円墳である(関川編1976)。2012年には航空レーザー測量が実施され、赤色立体地図が作成された(平田2014)。

斑鳩大塚古墳(13)は、1954年に墳頂部での忠霊塔建設工事に際して行われた最初の発掘調査で粘土層が検出され、銅鏡、石剣、武器などの副葬品が出土し、葺石と円筒埴輪列の存在が確認されている(北野1958)。その後、長らく調査は行われなかったが、2014～2017年度にかけて斑鳩町教育委員会・奈良大学文化財学科が発掘調査を行い、直径約43mで、東に幅約11.5m、長さ約3.4mの造出し、幅約8.9m、深さ約0.8mの周濠を有する円墳であることが判明した。周濠からは埴輪や土器が多数出土している(豊島・南編2018ほか)。

戸垣山古墳(12)は1974年に最初の測量調査が行われた(中井1975)。その後2011年に古墳の西側で立会調査が行われ、中期中頃～後半の埴輪片が出土している(荒木2014)。2017年に奈良大学が測量調査を行った。調査から、南北19m以上、東西17m以上、高さ約3.5mの方墳であることが判明した(豊島・南2018)。

寺山古墳群(6)は、4基の古墳で構成される古墳群である。2014・2015年度に奈良大学文化財学科が測量調査を行った。調査から、1号墳は直径約23mの円墳、もしくは全長約30mの前方後円墳、2号墳は直径約20mの円墳で、古相の群集墳である可能性が高いことが判明した(河村ほか2015)。3号墳、4号墳は2015年度に奈良大学文化財学科が測量調査を行った。調査から、3号墳は南北約19m、東西約13mの方墳で、4号墳は、長径約16m、短径14mの円墳と考えられ、それぞれ墳丘がさほど高くないため、埋葬施設は木棺直葬の可能性が高いことが判明した(間所・宮畑・豊島2016)。

本書で報告する甲塚古墳(1)は、藤ノ木古墳の西方に位置する直径30mの円墳と推測されて

いる。斑鳩町教育委員会・奈良大学文化財学科によって2016年度に測量調査、2018年度には第1次発掘調査、2019年度には第2次発掘調査が行われている。墳頂部では木棺直葬の埋葬施設を確認し、重圏文鏡1面が出土した。(土屋・豊島2016、豊島・南編2019、鈴木編2020)。また、2018年には斑鳩町教育委員会が古墳の西側隣接地を調査し、墳端らしき平坦面を確認した(平田2020)。年代は定かではないが、ひとまず中期古墳に含めておく。

後期古墳 後期古墳には、藤ノ木古墳(3)、春日古墳(4)、仏塚古墳(9)、梵天山古墳群(8)などがある。

藤ノ木古墳(3)は、法隆寺から西約350m地点に位置する直径約50m、高さ約9mの円墳である。南東方向に開口する全長約14mの両袖式横穴式石室を有し、石室内からは須恵器と土師器の土器群、金銅製の馬具や武器、武具、二上山産白色凝灰岩を用いて造られた未盗掘の朱塗りの列り抜き式家形石棺が確認された。石棺内からは金銅製の冠、銅鏡、刀剣類、玉類など1万数千点にのぼる副葬品と人骨が出土した。人骨は若年・壮年男性の2体分存在することが確認された(勝部ほか編1990、前園ほか編1995、平田2008)。

春日古墳(4)は、藤ノ木古墳の北東約150m地点に位置することから、藤ノ木古墳と同様に有力な後期古墳と目される古墳である。3次元レーザー測量調査、過去に行われた周辺の発掘及び立会調査によって、直径30m以上の円墳と推定される。また、墳丘南側斜面には石室の一部とみられる石材の露出が確認されている(平田2013)。

仏塚古墳(9)は、法隆寺の北方に位置する一辺約23mの周濠を巡らせた方墳である。両袖式横穴式石室を有し、石室内には環状に排水溝が巡ることが確認されている。石室内からは陶棺片、金環、刀子、須恵器、土師器のほか仏具や仏像も出土しており、中世には石室を堂として利用したと考えられる(河上・関川1977)。

梵天山古墳群(8)は、3基の古墳で構成される古墳群である。2018年に奈良大学文化財学科が測量調査を行った。調査から、1号墳は直径15m、2号墳は直径12m、3号墳は直径15mの円墳と推定される。いずれも墳丘が低く、1号墳、3号墳の盗掘坑付近で石室石材が認められないことから堅穴系の埋葬施設をもつ初期群集墳であると考えられる(豊島2019)。

終末期古墳 終末期古墳には竜田御坊山古墳群(2)、神代古墳(5)などが存在する。

竜田御坊山古墳群(2)は、藤ノ木古墳から西約250mの地点に存在し、3基の終末期古墳からなる。1・2号墳の墳丘形態や規模は不明であるが、1号墳の埋葬施設は高さ1m、長さ2m、幅1.7m程度の堅穴式石室状のものと推定されており、3体の遺体が埋葬されていたことが確認されている。金銅製釦付六花形座金具、鉄釘が採集されている。2号墳は横穴式石室を有する古墳であるが、石室規模は不明である。2号墳からは家形石棺蓋石の破片が出土している。

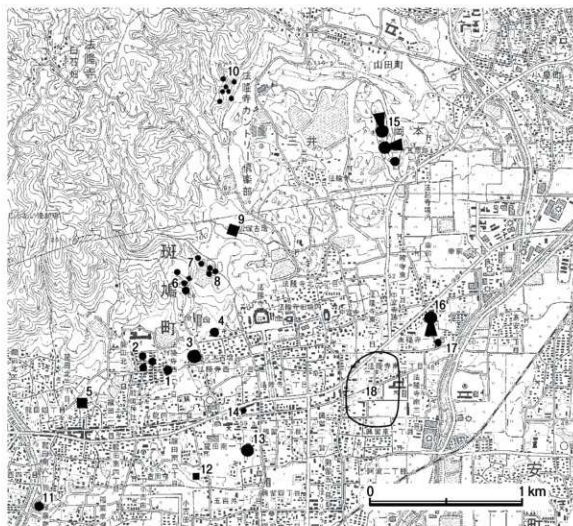
もっとも全容が判明している3号墳は、全長8m以上、高さ2.5mの円墳と推定される。埋葬施設は横口式石槨で、内部には黒漆塗りの陶棺が安置されていた。棺内からは若年男性の人骨1体と琥珀製杖、三彩有蓋円面硯、管状ガラス製品など類を見ない副葬品が出土していることから、被葬者は上宮王家の一員と想定されている(泉森編1977)。

神代古墳(5)は、瀧谷神社の境内に3個の石材がコの字形に並び、横口式石櫛をもつ古墳と考えられ、東西約20mの古墳と報告されている(前園編1990)。また、石櫛は7世紀中頃のものであると報告されている(山内1998)。2019年に奈良大学文化財学科が測量調査を行い、一辺約20m以上の方墳で、石櫛内法の規模は2.6m×1.6mであると判明した(豊島・松島2020)。

集落遺跡 集落遺跡には、酒ノ免遺跡(18)が挙げられる。酒ノ免遺跡は20以上に渡る発掘調査が行われている。調査では50棟以上の掘立柱建物が検出された。建物は掘立柱建物のみで構成されており、5世紀末から7世紀初頭にかけて営まれていたことが判明した。奈良県下有数の集落遺跡である(藤井1986)。

以上が、斑鳩町内の主要な古墳と古墳時代の遺跡である。

(の場紗希)



- 1 甲塚古墳 2 竜田御坊山古墳群 3 藤ノ木古墳 4 春日古墳 5 神代古墳 6 寺山古墳群
7 鹿草池古墳群 8 梵天山古墳群 9 仏塚古墳 10 三井古墳群 11 稲葉車瀬古墳群 12 戸垣山古墳
13 斑鳩大塚古墳 14 亀塚古墳 15 瓦塚古墳群 16 駒塚古墳 17 調子丸古墳 18 酒ノ免遺跡

図1 斑鳩町内の古墳時代遺跡分布図

第2章 調査の経緯と経過

1 過去の調査

古墳の現状 甲塚古墳は国（財務省近畿財務局奈良財務事務所）の所有地で、地目は畑であるが、字名が「甲塚」で丘状の高まりがあるため、「甲塚古墳」と呼称され、遺跡として保護されている。2015年10月から斑鳩町が管理団体となり、古墳の維持管理を行っている。古墳は「錦ヶ丘」と呼ばれる住宅地となっている丘陵東端に立地し、墳丘は現況で見る限り、西側は宅地、北側は農道によって削平され、旧状を保っているのは東側から南側にかけての部分に限られると考えられる。

測量調査の結果 甲塚古墳はこれまで一辺10mあまりの方墳と推定されてきた（前編1990）。藤ノ木古墳と竜田御坊山古墳群の中間に位置することから、藤ノ木古墳に後続する首長墓の可能性がある。しかし、墳丘は削平が進み、さらに崩落する恐れもある。今後、古墳の保存・活用を行ううえで正確な情報を把握する必要があった。そこで、2016年8月に奈良大学文学部文化財学科が測量を行った（土屋・豊島2016）。調査の結果、墳丘東側の斜面が標高59.8m付近まで円弧を描くことが判明した。それを墳端ととらえると、最大で直径約30mの円墳と推測できる。また、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室の金田明大氏、山口欧志氏のご協力を得て、2017年12月18日に地中レーダー探査を実施した。しかし、埋葬施設に関する具体的な情報は得られなかった。

以上の成果から甲塚古墳は従来の想定より規模が大きくなる可能性が高まった。また、埋葬施設が存在する可能性も考えられた。そこで古墳の実態を解明するため、2018年2月19日から同3月29日までの日程で第1次調査を行った。3ヶ所の調査区を設定した結果、第1調査区では盛土と石列を確認し、第2調査区では墳端と考えられる溝を確認した。しかし、埋葬施設の確認はできず、甲塚古墳が古墳であるという確証は得られなかった（豊島・南編2019）。

埋葬施設の確認と石列の性格、墳形と規模を確認するため、2019年2月18日から同3月28日まで第2次調査を行った。6ヶ所の調査区を設定した結果、第4調査区で埋葬施設を確認した。中心付近に赤色顔料の散布が認められ、重圓文鏡が1面出土した。第6調査区では墳端の可能性が考えられる地山の平坦面を確認し、第7調査区では第1調査区で検出した石列とは一連ではないと考えられる石列を確認した。この調査で甲塚古墳が古墳であることは確定したが、墳形や規模、年代を確認するには至らなかった（鈴木編2020）。

2 発掘調査の経過

前年度の成果をふまえ、石列の範囲と古墳との関係、墳端と古墳の規模を確認するため、3次調査を計画した。調査区は石列の範囲を確認するための第10調査区、墳端を確認するため第9調



1. 調査区の設定 (第10調査区)



2. 掘削の様子 (第9・10調査区)



3. 掘削の様子 (第12調査区)



4. 遺構の検討 (第11調査区)



5. 断面図作成 (第12調査区)



6. 写真撮影 (第12調査区)



7. 埋め戻しの様子 (第10・11調査区)



8. 参加者集合写真

図2 調査の様子

査区、第11調査区、第12調査区をそれぞれ設定した。

調査は斑鳩町教育委員会と奈良大学文学部文化財学科が共同で行った。調査期間は休日と雨天を除く2020年2月17日から3月13日までの計17日間で、経過は以下のとおりである。

- 2月17日 機材を搬入。各調査区を設定し、掘り下げ開始。
- 2月19日 第9調査区で地山を検出。第12調査区で中世の瓦が出土。
- 2月24日 第9調査区を上方へ拡張。第12調査区を上方へ拡張、中世～近世の土器片出土。
- 2月26日 第9調査区を南西へ拡張。第11調査区で石の抜き取り痕を確認、写真撮影。第12調査区の下半で地山検出。
- 2月28日 第9調査区で地山を検出。第10・12調査区写真撮影。
- 3月9日 第12調査区埋め戻し。
- 3月11日 第10・11調査区埋め戻し。
- 3月12日 第9調査区埋め戻し。
- 3月13日 機材の撤収。調査終了。

遺物整理と報告書作成 発掘調査終了後、2020年9月から翌年3月まで、奈良大学文学部文化財学科で遺物整理、および報告書作成を行った。

発掘調査参加者 今回の発掘調査の参加者は以下の通りである。(括弧内の学年は2020年3月当時)。

豊島直博(奈良大学文学部教授)、荒木浩司(斑鳩町教育委員会)、稲垣倭、梅村はるの、鈴木郁哉、田中秀弥、橋本有正、馬場彰加(以上、大学院修士1回生)、松島隆介、丸山亮(以上、文学部4回生)、辛川あかり、小林友佳、中川恋歌(以上、文学部3回生)、上西恭平、金田将徳、河田哲弥、北村達郎、佐藤直人、高橋草太、原口裕介、的場紗希、谷野誠也、(以上、文学部2回生)、阿部友音、岡田涼子、奥井大生、逢坂雅樹、大原 和、岸上維颯、高井秀樹、森山そらの(以上、文学部1回生)、大西幹男(通信教育部卒業生)、松井成之(聴講生)、山本美喜(京都橋大学歴史遺産学科4回生)、小久保茉優(立命館大学文学部1回生)

(上西恭平・金田将徳)

第3章 発掘調査の成果

1 調査区の配置 (図3)

今年度の調査では、墳丘の東側と南側の様相を確認し、古墳の規模と構造の解明を目指した。第1調査区の北東に第9調査区、第1調査区と第7調査区の間に第10・11調査区、第3調査区と第6調査区の間に第12調査区を設定した。

さらに、調査を進める過程で第9・10・11・12調査区では拡張を行った。その結果、第10・11調査区は連続することになった。以下、各調査区の成果について述べる。

(谷野誠也)

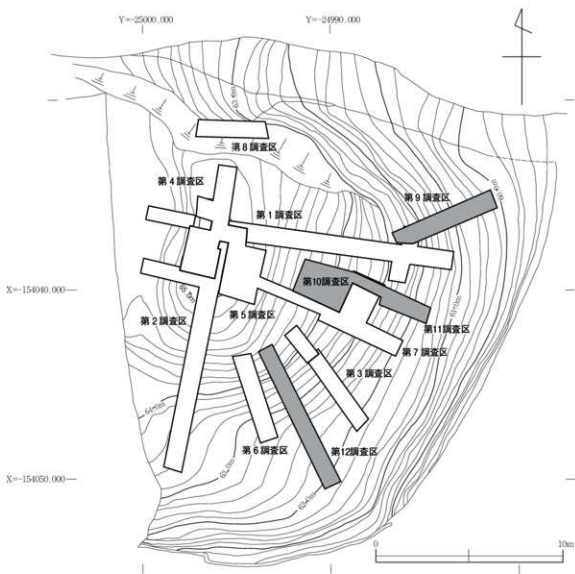


図3 調査区の配置 1 : 200

2 第9調査区(図4、図版1)

位置と目的 第9調査区は墳端の確認のため、第1調査区の北側に東西3m、南北1mで設定した。調査区東側は後世の攪乱によって地山や盛土の堆積が確認できなかったため、東西方向へ1mずつ拡張をした。また、西側で第1調査区の拡張区と重ねて一部を再発掘した。さらに、調査区西側を約1m拡張し、最終的な調査区面積は5.7㎡となった。

基本層序 調査区西側は上から順に、表土である暗褐色砂質土(厚さ約10cm)、中世の堆積土である明褐色砂質土(厚さ約10cm)、暗黄褐色粘質土(厚さ約5~20cm)、盛土である明灰褐色砂質土(厚さ約5~10cm)、盛土の一部あるいはその流土と思われる明灰褐色砂質土(厚さ約12~40cm)、地山である赤灰褐色粘質土に至る。盛土の一部あるいは流土と思われる明灰褐色砂質土の層は標高約62.3mでみられ、隣接する10・11調査区でも近い標高で盛土が検出されているこ

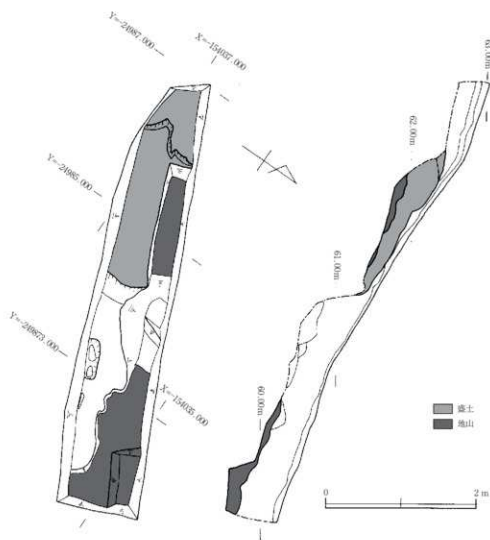


図4 第9調査区平面図・断面図 1:80

とから、同一の盛土の層と考えられる。調査区東側斜面は表土の下に後世の堆積土である暗茶褐色砂質土（厚さ約70cm）、根攪乱と思われる暗茶褐色砂質土（厚さ約10cm）が堆積し、地山である明灰褐色粘質土に至る。盛土との境界の地山検出面の標高は最も低いところで約61.4mである。

検出遺構 調査区西側で墳丘の一部を確認した。墳丘は明灰褐色砂質土の盛土で、その下層は地山で斜面をなし、東側へ傾斜していた。盛土検出面の標高は最も高いところで約62.4mである。墳端や第1調査区拡張区の石列のつづきは確認できなかった。なお、遺物は出土しなかった。

(山本美喜)

3 第10・11調査区 (図5、図版2・3)

位置と目的 第10調査区は、墳丘東側の様相を確認することを目的に、2017年度の第1調査区と2018年度の第5調査区・第7調査区の間に設定した調査区である。当初は墳頂側の幅1m、墳端側の幅1.5m、南側の長さ3mの台形の調査区であったが、調査区上端で検出した墳丘盛土と調査区下半部の平坦面の確認のため、調査区の南端を0.6m、東端を0.3m拡張し、調査面積は5.3㎡となった。また、第11調査区は、2017年度の第1調査区で検出した石列の続きを確認することを目的に、2017年度の第1調査区と2018年度の第7調査区との間に、調査区上端を第7調査区北拡張区に接するかたちで設定した。当初は長さ3m、幅1m、面積3㎡の調査区であったが、第10調査区と第11調査区の北壁断面を連続的に観察するため、第10調査区と連結させた。そのため、最終的な調査面積は、第10調査区と第11調査区と拡張区とを合わせて9.23㎡となった。

基本層序 第10調査区は南壁と北壁で基本層序が異なる。南壁では表土、流土、墳丘盛土、地山を確認した。表土は暗褐色砂質土（厚さ約10cm）で、流土は暗黄褐色砂質土（約15cm）であった。墳丘盛土は2層あり、墳頂側で粘性のある明黄褐色砂質土（約10cm）を、墳端側では粘質のある黄褐色砂質土（約15～20cm）を確認した。また、地山である白色粘土の混じる明黄褐色粘質土を確認した。

北壁は第11調査区と合わせて連続的に層序を観察し、表土、流土、中世堆積土、墳丘盛土、地山を確認した。表土は暗褐色砂質土（約10cm）で、流土は暗褐色砂質土（約20cm）、明黄灰褐色砂質土（約30～45cm）、暗橙褐色砂質土（約10cm）であった。中世堆積土は赤褐色砂質土（約25～40cm）、暗黄褐色砂質土（約40cm）で、2018年度の第7調査区で確認した石列の上にいる中世堆積土と同じものと考えられる。墳丘盛土は青灰褐色（橙色が粒状に混じる）砂質土（約10～13cm）、白色粘土が優勢な灰黄褐色粘質土（約10cm）である。地山は明黄灰褐色粘質土である。墳丘盛土上面は最も高いところで標高約64.4mである。

検出遺構 検出遺構には墳丘盛土と小穴がある。

墳丘盛土は、第10調査区全体にわたり検出した。第10調査区下端部の標高約63.3～62.9mの地点から拡張区の一部まで、幅約1.5mのなだらかな面を検出した。第11調査区上端部の標高約61.9mから幅約1.8mの平坦面を検出した。

第11調査区上端で南北に並ぶ小穴2個（SX01・SX02）を検出した。小穴は、径約30cm、埋土は灰色粘質土である。これは石列の抜き取り穴と考えられる。先述した平坦面はSX01・SX02の東側に続いており、この付近が墳端の可能性がある。

第11調査区上端部の中世堆積土から瓦片1点、土器片数点が出土した。

（幸川あかり・橋本有正）

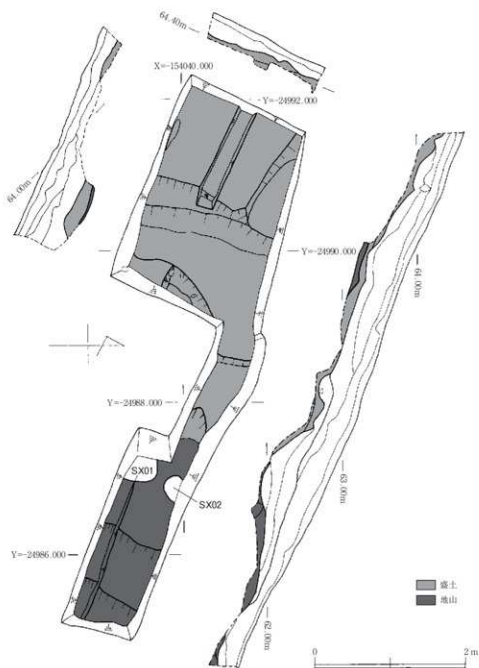


図5 第10・11調査区平面図・断面図 1:80

4 第12調査区 (図6、図版4)

位置と目的 第12調査区は、古墳の南東部における墳端の確認を目的として設定した調査区である。第6調査区と第3調査区間に、当初は長さ7m、幅1mの規模で設定したが、墳丘流土及

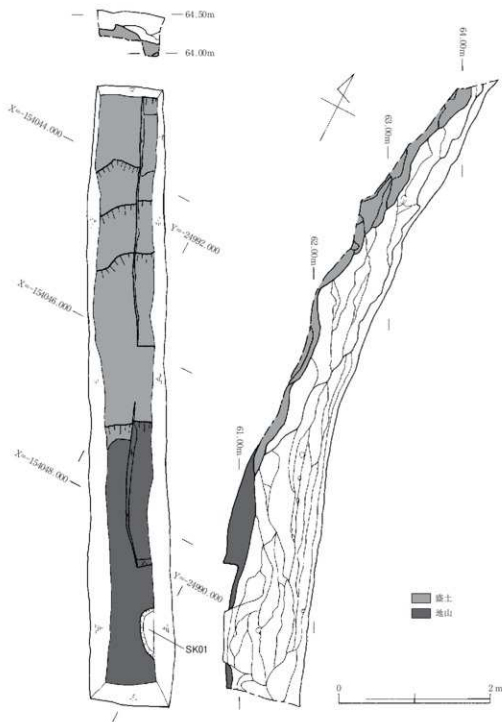


図6 第12調査区平面図・断面図 1:80

び盛土の堆積状況確認のために北西へ1m分拡張し、最終的な調査面積は8㎡となった。

基本層序 調査区北側は墳丘斜面、南側は平坦面となっており、それぞれ基本層序は異なる。北側の墳丘斜面部分は上から順に、表土である黒褐色砂質土（厚さ約5～25cm）、墳丘流土層である黄褐色粘質土、黄灰色砂質土（約5～40cm）、盛土層である黄褐色砂質土（2～20cm）となり、地山である灰色砂質土に至る。地山検出面は最も高いところで標高約63.9mである。

南側の平坦面は上から順に、表土である黒褐色砂質土（約5～20cm）、近世～近代の遺物包含層である黒褐色砂質土（約30cm）、その下の中世～近世堆積層は、上層が暗黄褐色砂質土、下層が暗褐色粘質土（約5～80cm）であり、次に中世の遺物包含層である明褐色砂質土（約10cm）、墳丘流土層である黄褐色粘質土（約10cm）、盛土層である黄褐色砂質土（約10cm）と続き、地山である橙褐色砂質土に至る。地山検出面は最も高いところで標高約61.2mである。

検出遺構 検出遺構には墳丘盛土と土坑SK01がある。

墳丘盛土は、調査区北端から南東に約5.1mにわたり検出した。調査区北側は、墳丘盛土である黄褐色砂質土が墳丘上部付近からなだらかに盛られており、その上に流土である黄褐色粘質土、黒褐色砂質土が堆積する。調査区南側は、地山面が次第に低くなり、調査区南端から約2.5m付近で平坦となる。その上に中世～近代の埋土が堆積する。

土坑SK01は、調査区南端から北に約30cmの位置で一部分のみ検出した。確認した範囲で、長さ約60cm、幅約20cm、深さ約10cmである。埋土中からは土師器片1点、陶器片2点、瓦片1点が出土した。遺物はいずれも中世のものと考えられる。土坑SK01は、検出位置、遺物等から古墳に直接関連する遺構とは考えられない。

近世～近代の遺物包含層からは磁器片や瓦片等が出土したが、墳丘盛土中からは遺物は出土しなかった。

（小林友佳・中川恋歌）

5 出土遺物（図7）

1は第12調査区の土坑SK01から出土した常滑焼の片口鉢である。調整は外面底部付近に斜め方向のヘラナデが施されているが、上限は確認できなかった。内面には2ヶ所の回転ナデと3ヶ

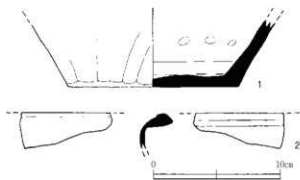


図7 土器実測図 1：3

所の指頭圧痕が確認できる。器壁の厚さはほぼ一定であり、底部は若干隆起する。胎土は2mm以下の砂粒を含む。外面の色調は赤褐色、内面は灰色を呈する。底部外面は白灰から灰色を呈し、内面底部付近のみ橙灰色を呈する。以上の特徴から中世（13世紀）の常滑焼の陶器と考えられる（中野1995）。

2は第12調査区の土坑SK01から出

土した土師器羽釜である。口縁端部が内側に向かってL字形に屈曲し、その後、端部を内から外へ折り返しておさえている。器面調整はナデ。胎土は2mm程度の石英を含む。色調は内外面ともに明るい橙色を呈する。以上の特徴から、中世（16世紀）の羽釜とみられる（菅原1983）。

（北村達郎）

第4章 総 括

最後に、今回の調査成果を総括したい。

各調査区の成果 第9調査区では、調査区の南西側で墳丘盛土を確認した。また、調査区の北東側で地山を確認した。地山は調査区外へ続く斜面となっており、明確な墳頂は確定できなかった。

第10調査区では、調査区全体で墳丘盛土を確認した。盛土は灰褐色粘質土と黄褐色砂質土を、墳頂部に向かって盛り上げるように積んでいた。

第11調査区では、墳丘盛土、石列石材の採取穴、地山を確認した。石材採取穴の東側では地山

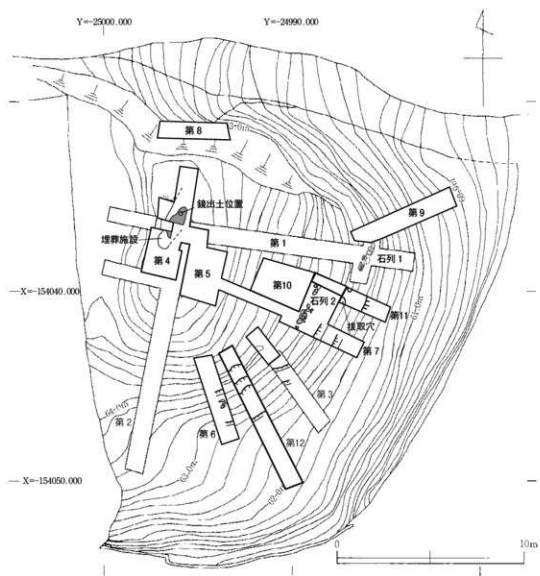


図8 甲塚古墳遺構全体図 1:200

が幅約1.8mの平坦面となっており、石列付近が墳端である可能性がある。

第12調査区では、調査区の北西側で墳丘盛土、南東側で地山を確認した。盛土は第2調査区や第6調査区と同様、灰褐色と黄褐色の砂質土を積んでいた。調査区の南東側では第2・6調査区で確認した中～近世の遺物包含層が堆積し、その下層が地山となる。地山は調査区南東端に向かって傾斜しており、明瞭な墳端は確認できなかった。

古墳の規模 第11調査区で確認した石材採取穴は、第1調査区で確認した石列1の延長線上に位置する。また、採取穴の東側で確認した平坦面は、南側の第7調査区に続く。石列1の付近を墳端とし、第4調査区で確認した埋葬施設が墳丘の中心にあると仮定した場合、古墳の規模は約20mとなる。

今回の調査では、甲塚古墳の墳形、規模、築造年代について正確な情報が得られなかった。古墳の適切な保存を図るためには、正確な形態と規模を把握することが必要であり、引き続き範囲確認調査を行う必要がある。

(豊島直博)

参考文献

- 荒木浩司 2007「駒塚古墳 (01-1次) 調査」荒木浩司編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成13 (2001) 年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2011「駒塚古墳 (02-1次) 調査」平田政彦編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成14 (2002) 年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2014「戸垣山古墳西側における立会調査出土の埴輪片について」『斑鳩文化財センター年報』第3号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 泉森 岐編 1977「竜田御坊山古墳群 付 平野塚穴山古墳」奈良県教育委員会
- 勝部明生ほか編 1990「斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書」斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 河上邦彦・関川高功 1977「斑鳩・仏塚古墳」斑鳩町教育委員会
- 河村万里・高左右裕・豊島直博 2015「奈良県斑鳩町寺山古墳群測量調査報告」『文化財学報』第33集 奈良大学文学部文化財学科
- 北野耕平 1958「斑鳩大塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物抄報』第十輯 奈良県教育委員会
- 菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 鈴木郁哉編 2020「甲塚古墳発掘調査報告書Ⅱ」奈良大学文学部文化財学科
- 関川高功編 1976「斑鳩町 瓦塚1号墳発掘調査概報」奈良県教育委員会
- 土屋博史・豊島直博 2016「奈良県斑鳩町甲塚古墳・亀塚古墳測量調査報告」『文化財学報』第35集 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博 2019「奈良県斑鳩町梵天山古墳群測量調査報告」『文化財学報』第37集 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・松島隆介 2020「奈良県斑鳩町神代古墳測量調査報告書」『文化財学報』第38集 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・南 貴匡 2018「奈良県斑鳩町戸垣山古墳測量調査報告」『文化財学報』第36集 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・南 貴匡編 2018「斑鳩大塚古墳発掘調査報告書Ⅳ」奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・南 貴匡編 2019「甲塚古墳発掘調査報告書Ⅰ」奈良大学文学部文化財学科
- 中井一夫 1975「斑鳩町戸垣山古墳の測量調査」『青陵』No.27 奈良県立橿原考古学研究所
- 中野晴久 1995「常滑・瀬美」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 平田政彦 2008「史跡藤ノ木古墳 保存整備事業報告書」斑鳩町教育委員会
- 平田政彦 2013「春日古墳墳丘測量調査報告」『斑鳩文化財センター年報』第2号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 平田政彦 2014「瓦塚古墳群航空レーザ測量調査報告」『斑鳩文化財センター年報』第3号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 平田政彦 2020「甲塚古墳隣接地 (17-1次) 調査」『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成28～30 (2016～2018) 年度』斑鳩町教育委員会
- 藤井利章 1986「奈良県斑鳩町 酒ノ免遺跡の研究」斑鳩町教育委員会
- 前園実知雄編 1990「斑鳩町の古墳」斑鳩町教育委員会
- 前園実知雄ほか編 1995「斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書」斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 間所克仁・宮畑勇希・豊島直博 2016「奈良県斑鳩町寺山3・4号墳測量調査報告」『文化財学報』第34集 奈良大学文学部文化財学科
- 山内紀嗣 1998「上宮王家の墓」網干善教先生古稀記念論文集刊行会編『網干善教先生古稀記念考古学論集』上巻 網干善教先生古稀記念会

圖 版

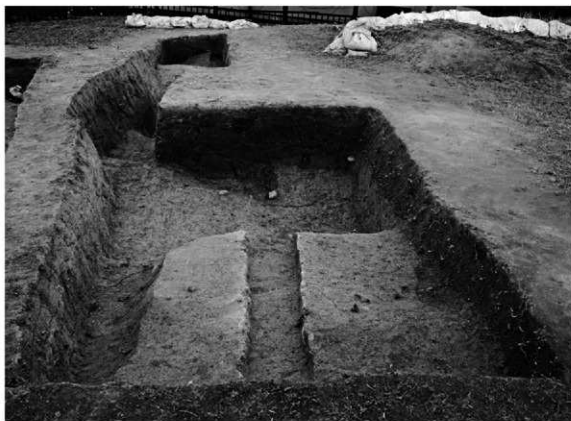


1 第9調査区完掘状況（北東から）



2 第9調査区墳丘側完掘状況（東から）

図版 2



1 第10調査区完掘状況（北西から）



2 第11調査区完掘状況（南東から）



1 第10調査区東半部検出状況(北から)



2 第11調査区SX01・SX02検出状況(東から)

図版 4



1 第12調査区完掘状況（南東から）



2 第12調査区完掘状況（北西から）



1 第12调查区出土常滑烧片口鉢 (外面)



2 第12调查区出土常滑烧片口鉢 (内面)



3 第12调查区出土土師器羽釜

報告書抄録

ふりがな	かぶとづかこふんはくつちょうさほうこくしょさん				
書名	甲塚古墳発掘調査報告書Ⅲ				
副書名	奈良大学考古学研究調査報告書第26冊				
編著者名	豊島直博、上西恭平、金田将徳、辛川あかり、北村達郎、小林友佳、中川恋歌、橋本有正、的場紗季、谷野誠也、山本美喜 (編集：松島隆介)				
発行機関	奈良大学文学部文化財学科				
所在地	〒631-8502 奈良市山陵町1500				
所収遺跡名	所在地		コード		
甲塚古墳	奈良県生駒郡斑鳩町龍田北1丁目1733		市町村	遺跡番号	
			293440	141	
北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
34度61分12秒	135度72分74秒	20200217～20200313	22.93㎡	範囲確認調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
甲塚古墳	古墳	古墳時代	墳丘盛土 小穴 土坑	土器	墳丘盛土、石列石材の抜き取り穴を確認した。

甲塚古墳発掘調査報告書Ⅲ

2021年3月発行

編集 奈良大学文学部文化財学科

発行 奈良大学文学部文化財学科
〒631-8502 奈良市山陵町1500

印刷 有限会社 真陽社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル

